

韓国男性運動の展開

佐々木, 正徳

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻 : 博士課程2年

<https://doi.org/10.15017/7389708>

出版情報 : 国際教育文化研究. 3, pp.53-64, 2003-06-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



韓国男性運動の展開

佐々木 正徳

近年、「男性性」¹を巡る問題が世界の多くの地域で語られ、男性学研究や男性運動の発展を促している。男性運動の萌芽について、コンネルはフェミニズムとの関係性を加味した上で、以下のように述べている。

「フェミニズムによって浮き彫りにされた問題は、単なる“女性問題”というわけではない。それらは、男性についての問題でもある。……現代社会の多くの男性は、自分たちが変化の渦中におり、ジェンダー関係が変化しつつあることを知っている。さらに自分たちがこうした変化に順応しなければならないことを理解している。……変化が始まっており、皆それを認識しているのである。したがって、歴史上まさにこの時期に、男性のジェンダーに対する慣例の改善を求めるアジェンダなど“男性運動”が芽生えたのである。」（コンネル 2000：61）

慣例の変革を求める男性学・男性運動は、1970年代に米国でその産声をあげた。男性学が学問として認知されるようになったのは1980年代に入ってからとされているが、男性学はその後急速な広まりをみせた。1984年には40の大学で開講されていた男性学講座が、92年には400にまで増加した（伊藤他 2002：122）。男性運動団体に注目してみるとフェミニズムの思想に近いものから相反するものまで数多くの団体が存在しており、運動が広く浸透していることを伺わせる¹¹。また、日本においても、1992年に京都大学で初めて男性学の講座が開かれ、男性学がその端緒についた。男性運動についても91年に関西で発足した「メンズリブ研究会」を皮切りに、数年のうちに各地で「メンズリブ研究会」が発足、95年には大阪にメンズセンターが設立された。96年からはメンズリブ研究会が中心となって開催する「男のフェスティバル」というイベントが年一回行われている。他にも多くの国々で、こうした男性学・男性運動の展開を見ることができる。

さて、こうした男性学・男性運動の胎動が1990年代から韓国においてもみられつつある。この動きは韓国社会に少なからぬ衝撃を与えているようである。一般に、韓国社会は男性中心的イデオロギーが強固な国として知られている。強固であることの理由としては、「男女有別」に象徴される儒教的な規範が現代においても残っていることと、この規範が資本主義社会の発達

によって韓国に流入してきた「家父長制」ⁱⁱⁱとの親和性が強かったため、高度成長期以後の韓国において男性支配がより強固になったということが指摘できよう。このイデオロギーは女性運動の方向性とは当然対立するものである。注 ii であげたクラッターボウの分類を参考にするなら、男性中心的イデオロギーが根強く浸透している地域において生起する男性学・男性運動は、保守派や男性の権利擁護派に近いものであり、男性の解放を志向するものは活発化しにくいと考えられる。ところが、実際に韓国社会において展開しているのは、従来の家父長的な概念から抜けだして新しい男性性（主として父性）を模索しようとする動きなのである。このことは、韓国社会における男性中心的イデオロギーが何らかの転換点に立っていることを示唆するものである。もちろんこうした運動を実践している男性は多数派ではないが、しかし、マスコミなどの影響から運動そのものの認知度は高いといえる。現今の韓国の男性運動は、実際に社会変化を引き起こすという意味では微弱かもしれないが、社会に与える影響力・インパクトはそれなりに有している可能性があるのである。

本稿は、これまでの韓国における男性学・男性運動の展開を整理し今後の方向性を検討することで、韓国社会に生じている変化の一側面を描き出すことを試みたものである。韓国における男性学・男性運動の展開については、既に韓国の男性学研究の第一人者である鄭^{iv}（2000a）が簡単に紹介している。しかし、ごく簡単なものに留まっており、主要な男性運動団体の設立経緯や活動内容についてすら詳細に述べられてはおらず、今後の韓国の男性学・男性運動の方向性を検討する上では十分なものとは言えない。ところが、韓国語で書かれた鄭（2000b）では、主要な男性運動組織の活動内容などが詳細に述べられており、非常に有用である^v。そこで本稿では、主にこの鄭（2000b）の論考と韓国の男性運動の中心的存在である「良い父親になろうとする人たちの集まり」の HP（fathers club）を参考にして、韓国の男性学・男性運動の展開を論ずることとする。先にも述べたが、韓国は男性中心的イデオロギーが非常に強く残存している社会である。そうした社会で生起し始めた男性解放を志向する運動の動態を明らかにすることは、男性学の可能性を検討する上で非常に示唆的である。また、日本の男性学・男性運動の趨勢との比較も可能になり、東アジアのジェンダーの比較研究においても有効な視点を提示することとなろう。

1. 男性学の成立と展開

男性学の展開と男性運動の展開は密接不可分なものである。しかし、本稿では煩雑さを避けるために各々の成立と展開を分けて整理することにする。双方の時代的な関係性は〔表 1〕によって確認されたい。本節ではまず、男性学の成立と展開をみることにする。

韓国の男性学の潮流を知るためには、最初に韓国の男性学がどういった問題意識をもって成立してきたものであるのかを知る必要がある。鄭は、諸外国の男性学の変遷を明らかにした上で、男性学を次のように定義している。

「既存の、性的イデオロギー (sexism) として形成された誤った男性らしさ (男性性) に対するいくつかの問題・内容を、(主に) 男性の立場から論議することで、男性の正しいジェンダーアイデンティティ (identity) と性役割などを通して、男性としてのみならず人間として誠実で幸福な生を営もうとする、男性の自己救済・救援的学問分野・接近 (自分の過ちは自分で解決しなければならないという原則ならびに女性学との相乗効果の原理)」(鄭 2000b : 169、() 内は全て原文による)

この定義から、韓国の男性学の特徴として、これまでの男性らしさ (男性性) は性的イデオロギーによって誤って形成されてきたとみなすこと、正しいジェンダーアイデンティティと性役割を見出して人間として幸福な生を営むことを目指すこと、あくまでも男性の自己救済的・救援的学問分野であるが女性学との相乗効果も志向していること、の三点を指摘することができよう。つまり韓国の男性学は、その当初から男性らしさの再検討と女性学との協調を志向していたのである。

次に、「男性学」という名のついた講義が韓国の大学で開設されるようになるまでの経緯を明らかにしてみる。そのためには、韓国内における女性運動の流れから概括していく必要がある。

韓国では女性学の歴史も決して長くはない。大学で初めて女性学講座が開設されたのは 1977 年 9 月、梨花女子大学の韓国女性研究所でのことであった。しかし、その後女性学研究は急激な発展を遂げ、韓国社会に確固とした影響力を有するようになってきた。女性学講座に関しては、99 年の段階で全国 158 の大学のうち実に 120 余りの大学の教養課程に開設されるに至り、一定の整ったカリキュラムも提供されるようになった。また、学問的活動としては、83 年に設立された女性開発院が中心となって積極的に調査・研究が行われ、その成果は数多くの報告書としてまとめられている。こうした活動は、一貫してジェンダー問題の解決へ向けての働きかけを行ってきた (鄭 2000a : 75、佐々木 2001)。

鄭は、こうした成果を認めつつも、女性学がともすれば男性という存在を一方向的に悪と決めつけ排除の対象にしようとする傾向があることを憂慮していた。そのため、男性の立場と諸問題を扱う男性学の必要性を切実に感じ、韓国で男性学を誕生させるべく数々の活動を 1993 年以降展開させていくことになる。

93 年以降、鄭は大学の新聞や学報への寄稿と平行して、一般の新聞、雑誌、TV、ラジオなどへの寄稿や出演を通して、継続して男性学を紹介し認知度を高める活動を行っている。その具体例の一つが〔表 1〕の 93 年、建国大学の大学新聞への寄稿「男性学は大学の教育課程として開設されねばならない」である^{vi}。94 年 5 月には建国大学総女子学生会主催の公開学術特別講義として、初めて韓国で男性学の講座が開設された。梨花女子大学での女性学講座の開設から、実に 17 年の歳月が流れていた。

その後、鄭は 96 年にフランクリンの『男性と社会』を『男性学とは何か』というタイトルで、翌年には伊藤公雄の『男性学入門』を同タイトルでと、翻訳本ではあるものの連続して男性学のテキストとなる本を著し、男性学の普及を一段と推進していった。そうした活動の甲斐もあってか、98 年には釜山大学の社会学科が特別講義として、新羅大学の教養課程が常設の公開講

男性学に関する出来事	西暦年	男性運動、関連団体など
	～90	メタ・マン運動 プロミスキーパーズ運動
	91	5-10 月：普通の父親による「絵本製作ワークショップ」 11 月：父親の会発足の意思確認
9 月：文化日報（25 日）内で男性学について言及・紹介	92	5 月 1 日：「良い父親になろうとする人たちの集まり」発足
女性の集まり四 『男性研究』（ナラサン）出版 11 月：鄭萊基が建国大学新聞に「男性学は大学の教育課程として開設されねばならない」掲載	93	
5 月：建国大学で「男性学の理論と実際」（公開特講）	94	
	95	4 月：著名人を中心に「平等文化を育てる男性の集まり」発足 5 月：男性のための相談電話「男性の電話」開設
鄭萊基訳『男性学とは何か？』（サムソン）出版	96	
鄭萊基訳『男性学入門』（教育科学社）出版	97	5 月：「韓国父親クラブ全国機構」発足 5 月：一般人中心に「平等文化を育てる男性の集まり」新発足 10 月：「NGO 父親財団」結成
1 学期：釜山大学社会学科で「男性学」（専攻科目社会学特講） 2 学期：新羅大学で「男性学詳説」（公開教養課程）	98	
	99	1 月：「男性の電話」がインターネットによる相談開始
2 学期：ハンシン大学神学大学院で「男性学と霊性」 学術振興財団「保護学問育成」プロジェクト「新千年韓国男性の問題点と克服の模索」として男性学・男性運動の関連分野を採択	00	
	01	6 月：「娘を愛する父親の集まり」発足

〔表 1〕1990 年代以降の韓国における男性学と男性運動に関する出来事

座として男性学講座を開設するに至った。2000 年からはハンシン大学神学大学院で「男性学と霊性」というタイトルの科目も開設されている。また 2000 年度の韓国学術振興財団のプロジェクトとしても男性学に関連する部門が採択されており、学問の世界においては徐々に男性学はその位置を築き始めているようである。建国大学での特別講座が韓国における男性学の誕生とするなら、韓国の男性学は誕生からまだほんの 10 年弱しか経過していない。90 年代後期以降の男性学の展開は、女性学が急激な速さで社会に浸透していったのと同様に男性学も加速度的に社会への認知度と影響力を強めていくことを期待させるものである。

2. 男性運動の成立と展開

鄭は男性学の興隆に比して、韓国の男性たちの行動が伴ってこないことを問題視している^{vii}。しかし、韓国において男性運動が存在しないわけではない。むしろ希少であるがゆえに、男性学の認知度を上昇させるのに寄与してきたという側面があることは間違いない。そこで本節では、韓国での男性運動の潮流の概観と、男性運動において中心的な位置を占めている「よい父親になろうとする人たちの集まり」（以下、「父の集まり」）の活動理念や内容を明らかにする。以上の検討を通して男性運動の過去から現在までの方向性を明らかにし、続いて今後の方向性を探ることにしたい。

a. 男性運動の潮流

鄭の提起する男性学との関連性は薄いものの、韓国では男性学の成立以前から男性運動と呼べるものがいくつか存在していた。「メタマン（Meta Man）運動」や韓国版「プロミスキーパーズ（Promise-Keepers）運動」などキリスト教の信仰に関するものが、その代表的な例である。しかし、昨今の男性運動の主流は「父の集まり」に代表される、良い父親になることを目標とした一連の活動である。これは韓国の男性学の志向性と親和性が高い。父親運動は1990年代初期から顕著になりはじめるが、これは男性運動の広まりと期を一にするものである。〔表1〕には比較的規模が大きく発足時期や活動内容が明らかなものだけを掲載しているが、現在、大小含めて70ほどの男性運動団体・集まりが韓国には存在している。そして、このうち実に19団体が「父の集まり」の地方組織である^{viii}。この点からも、「父の集まり」が現在の男性運動の中心的存在であるとみなすことができよう。では続けて「父の集まり」の成立過程や活動内容をみてみることにする。

b. 「父の集まり」の成立と展開、活動内容

「父の集まり」の原型は1991年の5月1日に遡る。この日、12名の若い父親が集まって、自身の子どもを主人公にした絵本を作るワークショップを行うことにした。ワークショップは5ヶ月に渡って行われ、10巻の絵本を編み出し、同年の10月初旬にソウルのオリンピック公園で絵本の原画展示会が行われた。この一連のワークショップは多くの人々の興味関心を惹起し、マスコミによる取材も行われた。「専門家でない多様な職業のとても『平凡な若いパパたち』が本を作るという理由だけでも、言論の注目を受けるのに十分だった」（鄭 2000b : 206）のである。同年11月、絵本作りに参与した10名の男性が再び集まり、現代社会で父親の地位と役割が失墜していることを認め、こうした問題を少しでも解決していくための組織の発足を決意した。それが「父の集まり」である。「父の集まり」は翌年の5月1日に、父親であるということだけをメンバーに必須の共通点にした、時代に適合した望ましい父親像を生活実践を通して追求していく集まりとして結成された。「父の集まり」が目標とする父親像は、次の五つの要素を持った父親である。

- ①家庭の幸福を育成していく父親
- ②家庭と隣家の安全を守る父親
- ③健全な生活を先導する父親
- ④文化の粋を愛する父親
- ⑤大人らしい大人として尊敬される父親

そして、このような父親になるための方法として次の 12 の方法を提示している。

- ①子どもと旅行する父親になろう
- ②子どもを褒めてあげる父親になろう
- ③子どもが家庭の温もりを感じられるようにしよう
- ④子どもと一緒に書店に行こう
- ⑤子どもの学校に行こう
- ⑥家族に手紙を書いてみよう
- ⑦両親の故郷を子どもと一緒に訪れよう
- ⑧一週間に一度は家族の日になろう
- ⑨父親は子どもが成熟した人間に育つための助力者であることを肝に銘じよう
- ⑩父親も感情を持った人間であることを見せよう
- ⑪交通信号を守る父親になろう
- ⑫約束を守る父親になろう

更には、こうした目標を追求するために、以下のような様々な活動を行っている。

- ①父親役割プログラム：パパと一緒に汽車旅行、子どもと一緒にキャンプを、子ども蚤の市などといった、外部へ行く行事を年間 8 回以上実施
- ②今年の良い父親賞授賞式：毎年 5 月 1 日を父親の日と指定し、「家庭の幸福部門」と「社会の公共部門」に分けて授賞式を行う
- ③夫婦幼稚園の運営：夫婦間の正しい対話の方法と子女教育の指導法などを中心に、隔月で毎週 3 時間ずつ総 12 時間実施
- ④父親クレジット発給：クレジットカード会社と提携して「父親センター建設」のために、クレジットカードを発給
- ⑤父親後援会運営：父親がいない少年・少女の家長を探して、父親の役割をしてあげる父親後援会の運営
- ⑥ホームステイプログラム：海外の家族団体と提携してホームステイを行い、海外の家族と相互訪問することでお互いの文化を体験する「われわれは地球村の家族」プログラムの実施
- ⑦各種行事ならびにセミナー：国内外の関連団体と提携した各種行事やセミナーの実施

これらを見てわかるように、各種行事やセミナーは子どもたちと共に行うものが多い。子どもと一緒に行事を行うことで、父親自身のアイデンティティを認識する契機にすることを試図しているからである。上に挙げた行事以外にも、毎月さまざまな規模の行事が行われている。また、会員へのニュースレターも発行しており、集まりに関連した様々な情報を提供している。

これら活動の中で特に重要な位置を占めていて、「父の集まり」が重視している理念をより明確に知ることができるのが、5月1日の「父親の日」の活動である。この日は「父の集まり」発足の日でもある。「父の集まり」はこの日を次のように規定している。

「この日は、父親が昔の家父長的父権を回復して子女からプレゼントなどを受け取る日ではなく、普段から社会生活を行うために家長として忠実たろうという意味でつくられた。父親の日の宣言の基本は平等主義にある。夫婦の間に、父と息子・娘の間に人格的な平等を実現する過程で、父親らしい父親になろうという誓いを宣言する日である」（「fathers club」HP より）

「父の集まり」はこの日、一家に次のような行為の実行を要請している。

- ①父親は、この日を「子女と家族に対する奉仕の日」と考えて、すべての日程を家族中心に組み立てて、実践すること
- ②妻は、この日一日だけでも夫が子どもの前で立派な家長の姿を見せることができるように激励して慰労してあげること
- ③子どもは、この日一日だけでもパパを「おとうさん」と呼んで、お父さんの靴を綺麗に磨いてあげること
- ④職場では、子どもを持つ父親の出勤時間を一時間遅らせて、子どもが登校する姿を見て出勤することが出来るように配慮してあげること
- ⑤家庭では、この日朝食を家族全員で一緒に食べることにすること

「父の集まり」のこうした行動指針や目標¹⁸はすべて、家長としての立場を保持しつつ時代の変化に適合した父親の姿を再構成しようという意思に貫かれている。言ってみれば、家長としての父親の役割の再構築である。父親運動が家長としての男性の役割の解体ではなくて、時代の要請に合った理想的な在り方を追求しているということは重要な点であろう。

c. 今後の展開

これまで見てきた運動の内容や目標から、「父の集まり」は変貌する現代社会に適合することができるよう新たな父親像の模索をその第一の目標に掲げていると考えられる。そのような理想の父親像を追求する動きの一つの到達点として、全国各地に様々な形態で存在していた父親運動団体を一つの全国運動団体とする「韓国父親クラブ全国機構」が1997年に設立された。

これには設立当初は 30 の団体が加盟していたが加盟団体は徐々に増加しているようである^x。97 年に行われた設立総会では、フェスティバル、設立のセレモニー、シンポジウムが行われた。ここにおいても新しい理想の父親像の模索という方針は維持されており、今後も韓国の男性運動は、それを一つの大きなテーマとして展開していくと考えられる。

まとめ～今後の男性学と男性運動の方向性と可能性～

ここまで韓国における男性学と男性運動の生成と展開について概観してきた。最後に、この二つの潮流が果たしてきた意義と現在の位置づけを確認したうえで、今後の方向性と可能性について論じてみたい。

韓国における男性学の意義は、一言で言うなら女性学にとっての盟友になり得たことである。男性学にも多様な志向性が存在することは最初に述べたが、韓国において推進されつつあるのはこれまでの在り方を堅持しようとする保守派・権利擁護派的な立場の男性学ではなくて、従来の権威的なものとは異なる新しい男性性を見出していこうとする立場の男性学であった。この潮流は、女性学によってともすれば多様性が無視されがちであった男性性の問題に、男性自らが問題意識をもって踏み込むことで、より現実在即したレベルで男性性の問題を論ずることを可能にしつつある。これは、男性学と女性学が共通する志向性を持って展開していくことを示唆しており、その意味で今後のジェンダー研究の発展にも重要な意義をもつことになるだろう。日本がそうであったように、近い将来韓国においても「ジェンダー学」という名のついた学問が登場することになるかもしれない。

韓国における男性運動は、良い父親になることを目指す父親運動が主流を占めている。諸外国の男性運動においても良い父親になることを目標とした男性運動は存在しているが、男性運動の大部分を占めているわけではない。韓国で父親運動が主流となった理由を論ずることは本稿の範囲を超えており、別に機会を設ける必要があるだろうが、現代韓国に特徴的な社会規範の存在がその背景にあることが予想される^{xi}。

さて、一連の父親運動は、男性学的な視点を多くの人に普及させるために、実践のレベルから非常に有効に働きかけてきたしこれからもそうであり続けるだろう。メディアなどの媒体を通して自らの男性性の在り方に興味を持った人に対して、男性運動（父親運動）が実践的に働きかけ意識変革の一助を担っていく。その過程を通して男性学と男性運動の関係性は今よりもずっと緊密になり、相互に影響を与え合いながら発展していくことになるのである。

ところで、以上のような可能性を秘めた韓国の男性学・男性運動であるが、解決していかなければならない問題を少なからず抱えていることも事実である。それは単純に言うと、男性学・男性運動への反発についてどういった対応をとりえるかということである。

男性学・男性運動への反発は大別して、女性からによるものと男性からによるものがある。このうち女性からによるものは、大半が男性学が女性学に対抗する学問として誕生したのではないかという疑問から生じているものである。韓国の男性学の方向性がそうではないことは本

稿で明らかにした通りである。よって、この種の誤解については、今後男性学・男性運動が拡張していく中で徐々に氷解していくものと考えられる。

問題はもう一方、つまり当事者である男性からの反発である。「父の集まり」が全国的な広がりを見せているとはいえ、韓国男性の大多数は男性運動には参与していない^{xii}。多くの韓国男性にとって男性問題はいまだ対岸の火事ではないのである。こうした男性たちに対して男性の解放を訴えることは、女性学が男性を無条件に排除したことによって受けた反発を、男性学も受けることになりかねない。なぜなら、自身の男性中心的イデオロギーに何の疑念も抱いていない男性にとっては、男性解放を訴える声は、男性の間で存在する意識の多様性を捨象しているように感じられる可能性があるからである。今後の男性学・男性運動はこの男性側からの反発にどういった対応をしていくかが重要な課題となろう^{xiii}。それは韓国に限らず日本でも同様である。こうした問題への取り組みを日韓が相互に参照することで、問題解決への示唆が得られるかもしれない。ジェンダーに関する比較研究の意義は、まさにこうした実践的な面にあるのである。

ⁱ ここでは「男性性」を「社会的かつ文化的に男性の属性とされる特徴と資質」をさすものであると、とりあえず定義しておく。

ⁱⁱ 鄭(2000a)や曹(2000)によると、クラッターボウは著書(Clatterbaugh, K. C 1990 *Contemporary Perspective on Masculinity*, Westview Press)の中で、米国で生起している多様な男性学・男性運動の潮流を、保守派・フェミニズム支持派・男性の権利擁護派・精神主義派・社会主義派・マイノリティ派・キリスト教派の七つに分類しているという。また、伊藤はこれを参考にして、親フェミニスト派・保守派・男性の権利派・精神主義派・社会主義派・ゲイ派・ブラックアメリカン運動の七つに再分類している(伊藤 1996: 143)。

ⁱⁱⁱ ここでいう「家父長制」とは、ミレット(1985)が男女間の男性優位の権力関係と呼び表すために用いた用語を意味しており、朝鮮王朝期の韓国において存在していた父系原理に基づく家父長制を意味するものではない。これまで韓国におけるジェンダー研究では、両者の家父長制の違いにはあまり関心が払われてこなかったきらいがある。しかし、韓国のジェンダー構造を明らかにするためには、今後この違いを意識した上で研究を進めていくことが重要であろう。双方の相違と、それを同一視することの問題点については、稿を改めて論ずることとしたい。

^{iv} 本稿が多く参照する鄭菜基は、1993年以降メディアへの出演や大学での講義など多彩な方法を用いて男性学に関する情報提供を行ってきた韓国の男性学のパイオニア的存在である。その活動は国内に留まることなく、米国男性学会会員、日本メンズリブ研究会特別委員でもある。日本の男性学者との交流も深く、日本の「男のフェスティバル」には第二回大会から欠かさず参加している。現在、江原観光大学教授、韓国男性学研究会会長、娘を愛する父親の会共同代表などを兼任している。

^v ちなみに、鄭(2000b)においては、韓国の事例だけでなく諸外国の男性運動の展開についても述べており、男性運動の世界的な潮流を理解するうえで非常に有益なものである。中でも、米国と日本の事例について特にたくさんの紙幅を費やして詳細に述べられており、韓国の男性学・男性運動が特にこの二国の影響を強く受けているということを読み取ることができる。

^{vi} 鄭によると、これが彼が男性学の必要性を訴えた初めての寄稿である(鄭 1996)。

^{vii} 鄭は、韓国の一般男性の男性学・男性解放運動への関与度が、米国や欧州、日本に比べて低い(あるいはほとんどない)ということの問題にしている。しかし、私見では日本との関与度の差については改めて比較検討する必要があると思われる。

viii 「父の集まり」支部は増加傾向にある。今回得られた資料によると、2003年5月の時点で存在している支部は次の通りである（判明分のみ[設立年、設立時人数]）。ソウル[1992、400]・釜山[1996、420]・仁川[1996、46]・ノンサン[1997、50]・木浦・安東・群山・済州・春川・全州・チンチョン・コソン・ファソン・大田・タンジン・元州・九里・東草・大邱（「fathers club」HP、「子ども家族相談室」HP）。

ix 「父の集まり」は他にも「良い父親宣言」によって、参加者の実践意思を高めている。内容は、①われわれはすべての父母を尊敬して子女愛の心を広く実践していきながら、家庭と社会に穏やかで平和な環境を作るように努力する、②われわれは正々堂々と生の枠の中で、お互いを尊重し激励して、創造的な生活文化のスタイルを探し出して、隣家と共に分かちあうように努力する、③われわれは未来で尊敬される正直な大人を志向しており、家庭と社会でよい父親の姿を実践してみられるように努力する、の三点である。

x これについては正確な数値を手に入れることができなかったために、現在いくつの団体が加入しているのか、設立から数年で加入数、様相がどう変わったのかなどの詳細は不明である。今後の課題としたい。ただし、設立の時点では将来的に70団体程度が加盟する予定であったようである（伊藤他 2002：232）。

xi この「現代韓国に特徴的な社会規範」とは一体何であるのかを明らかにすることが、今後の重要な課題である。これを明らかにするためには、注iiiで述べたように家父長制の検討を行うことが、何らかの手助けとなりそうである。

xii 残念ながら今回用いた各資料からは、男性運動組織に参加している男性の実数に関する情報を得ることはできなかった。これについても今後の課題としたい。しかし、男性運動に参加している男性が多数派でないということは明言できよう。

xiii また、本稿の主旨に外れるので触れなかったが、同性愛者とホモフォビア（同性愛者嫌悪）の問題についても男性学は周縁化せずに扱っていく必要があることは言うまでもない。

〈参考文献〉

○日本語

- 趙惠貞（春木育美訳） 2002（1988）『韓国社会とジェンダー』、法政大学出版局
江原由美子・金井淑子編 1997『フェミニズム』、新曜社
ハム、マギー（木本喜美子・高橋準監訳） 1999（1995）『フェミニズム理論辞典』、明石書店
ヒラータ、ヘレナ他編（志賀亮一他訳） 2002（2000）『読む事典・女性学』、藤原書店
伊藤公雄 1996『男性学入門』、作品社
伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子 2002『女性学・男性学』、有斐閣アルマ
鄭菜基（千奉祚訳） 2000a「韓国における『男性学』と『女性学』」日本ジェンダー学会編『ジェンダー学を学ぶ人のために』75-90頁、世界思想社
コンネル、ロバート・W（中村真由美訳） 2000「男らしさ、ジェンダーおよび暴力の問題」日本ジェンダー学会編『ジェンダー学を学ぶ人のために』59-74頁、世界思想社
ミレット、ケイト（藤枝滯子訳） 1985（1970）『性の政治学』、ドメス出版
佐々木正徳 2001「韓国高校生の性役割意識—全州市高校生へのアンケート調査から—」『九州教育学会研究紀要』（通巻第29号）115-121頁
瀬地山角 1996『東アジアの家父長制』、勁草書房

○韓国語

曹廷文 2000 「男性学のいくつかの研究観点ならびに研究領域」 曹廷文他著『男性学と男性運動』63-238 頁、同門社

Clyde W. Franklin II (鄭菜基訳) 1996 (1988) 『男性学とは何か』、サムソン

鄭菜基 2000b 「男性運動に関する諸研究」 曹廷文他著『男性学と男性運動』15-61 頁、同門社

〈参考 URL〉すべて韓国語

fathers club, <http://www.fathers.or.kr/>

韓国女性団体連合, <http://www.women21.or.kr/news/default.asp>

子ども家族相談室, <http://living.snu.ac.kr/%7Echildfamily>

娘を愛する父親の集まり, <http://www.daughterlove.org/>

The Development of Men's Movement in Korea

Masanori SASAKI

After the 1990s, men's studies and men's movement have developed in Korea. The Korean men's studies and men's movement are very interesting. Because, new man characteristic is groped despite the influence of man central ideology remains to be strong relation.

In this paper, I try to rearrange the Korean men's studies and men's movement and to examine future directivity. As for this attempt, it is possible to present effective point of view when comparative research East Asian gender.

1. Formation and development of men's studies

There are three features in the Korean men's studies.

- A. In the past, men's characteristic was formed with sexual ideology mistaking
- B. Searching correct gender identity and characteristic role, you operate happy life as a human
- C. It is self relieve academic field of man, but you aim also the multiplier effect of women's studies

The Korean men's studies history is shallow. But accelerating degree of acknowledgment to society and influence is strengthened.

2. Formation and development of men's movement

As for present Korean men's movement group, "fathers club" has borne central role. "Fathers club" started in 1992. Their purpose is to reconstruct the form of the father who conforms to the change of age while maintaining standpoint as a head of a family. In other words, it is reconstruction of role of the father as a head of a family. It is important that men's movement has pursued the ideal way of the ideal head of a family who is agreeable to the request of age, not deconstruction the role of the man as a head of a family. "Fathers club" being center, it was formed "fathers club in Korea" in 1997. Here as for the policy, groping the father image of new ideal it is maintained. In the future, the Korean men's movement will keep groping the father image of ideal as important theme.

By the way, there is a big problem we must solve in the Korean men's studies and men's movement. That is correspondence for the rally from the negative men in men's studies and men's movement. However men's movement is developmental, with says, as for men's problems still are others thing for the most Korean men. So, as for aiming toward release unconditionally, there is a possibility of causing their resistance. Because, it makes the possibility cause abstraction of doing variety of consciousness between the men. This problem exists even in Japan not only Korea. It is necessary to refer to practice mutually. One of meanings of the comparative research regarding gender just is such practical aspect.